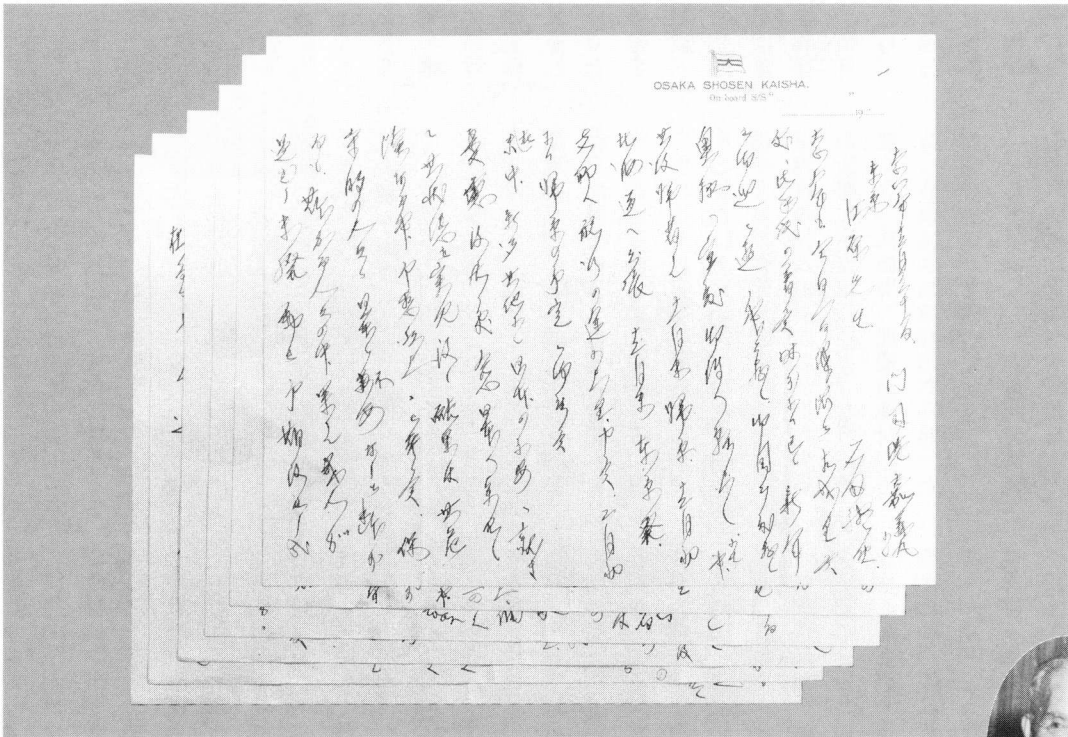


# 明治史料館通信

1993. 1. 25 (季刊 年4回発行) Vol. 8 No. 4 通巻第32号



大正8年(1919)12月31日 石田禮助が、江原素六にあてた手紙  
(江原素六文書E-a-31)



石田禮助

## 江原素六とその周辺<18>

### 石田禮助の手紙

昭和三八年(一九六三) 第五代国鉄総裁に就任、東海道新幹線の開業などを担当し、民間出身のユニークな人柄と清新さで国民にアピールした石田禮助(一八八六―一九七八)は、戦前には三井物産で活躍した実業家だった。

彼は静岡県の西伊豆・松崎の生まれであり、同郷の江原素六を頼り麻布中学校に学び、親しくその薫陶を受けた。明治三十六年(一九〇三)に江原の長男が亡くなった時は、寄宿舎総代として悔状を書いている。(江原素六文書E-a-32)。

東京高等商業学校卒業後、三井物産に入社、シアトル、ボンベイ、カルカッタ、大連、ニューヨークなどの支店長を歴任し、昭和十一年(一九三六)常務、同一四年代表取締役となった。

日米開戦反対を政府に進言しようとするなど、リベラルな国際派経済人として知られるが、若き日の大正期に恩師江原にあてた手紙からもそのことが伺える。

大正八年(一九一九) 一月三十一日

付の書状（江原文書E—1—31）から紹介してみよう。中国へ向かう客船が門司港に停泊中に書いたものである。彼は久しぶりに日本に帰国していたらしく、「新聞其他にて日本の不安ニ就き憂慮致居候 処愈日本へ参り候て其状態を其見 致候結果は其危険なる事予想以上ニ御座候」と言い、「保守的の人々ハ日本ニ不安なし」と断定するが、その人々の果して何人が先般の米騒動を予期したであろうかと続ける。「然も今日の日本の状態は米騒動時代ニ比べより一層 Critical の状態ニ有シ物と見シ間違なくと存候、或米人が Bolshevism の発生は、極上層と極下層の両階級に在り」と申候が、今回、坂神に参り候て其成金連中の豪奢振を見ては富者階級亦 Bolshevism の発生者なりとぞの事の真理なるヲ真ニ悟り申候」とさらに続く。すなわち、石田は米騒動後の日本の社会状況を観察し、ボルシェビズムなどの急進的な階級闘争の発生の一因が資本家側にもあることを指摘しているのである。そして日本にも今後ボルシェビズムが確実に起きる

と確信するとまで言う。

さらに、「兎ニ角過去三ヶ年間に於ける日本人思想の変化は恐ろしき物有り」とし、政治家へも批判の矛先を向ける。「為政者ハ此変遷しつ、有る思想を Lead して善化するニ非ず、唯何等の理解なく、之を check せんとしつ、有る哉ニ被見申候」。「政府并ニ資本家の代表者カ何故も少し大きく出でて、労働者へ同情の有る処をも少し示す様ニ努力せざりし哉、多数の人々が大ニ遺憾とする所、蓋し道理有り」と存候」。そして、宮内省が皇室財産の拡大に躍起になっていることを批判する者がいることを例に出し、「日本ハ何処迄も皇室中心主義にて行かねばならぬ事ハ誰一人異議有るべき筈」はないが、宮内省の役人のように「世界思想の大勢」を無視したような政治が続くと、「其結果の那辺ニ落付くや蓋し憂うべき物か有之と存候」と言う。

そして最後に、「兎ニ角此労働問題の解決の結果如何が今後日本の盛衰裏を握るべきなり」と存候」とし、「此意味ニ於て先生の如き人等が新年を期し其国政ニ向て充分の御努力被遊候事ハ小生の切ニ希望致候処ニ御座候」と結んでいる。石田は過去三年間における日本人の思想の激変を述べているが、大正六年（一九一七）から八年までの間には、ロシア革命、シベリア出兵、米騒動、朝鮮三・一独立運動、中国五・四運動など、実に大きな事件が国内外で起きていたのである。特に国内的には普選運動・労働争議・小作争議が高揚するなど、大正デモクラシーが一気に深化・拡大した時期であった。石田の手紙には、このような時代状況からする知識人の危機意識が漲っているのである。

次に大正十一年（一九二二）五月一二日付でインドのカルカッタから出された手紙（江原文書E—1—33）を紹介しよう。江原が亡くなるわずか七日前のものなので彼はたぶんこれを読むことはできなかったであろうが…。

まず、「母国衆議院の醜態実ニ困った物ニ御座候、新聞紙を通して見たる日本の現状無心にて其将来を想へば果して無事ニ唯今の過渡期を切抜得る哉否ヤ寒心ニ堪へざる物有之候」と、議会の醜態を酷評する。また、「労働者ハ取る事を知つて与ふる事を知らず」、「金を持てる者乃至 Capitalists ハ live & take の要諦を知らず」と労働者と資本家の双方を槍玉に挙げ、特に、「大体金持か金を持つ愉快なる物ハ其之を獲る道程ニ存し、持つてしまへば存外つまらぬ物なりと小生考へ居候」と述べ、金を稼いだらそれを社会に還元してこそ意味があると主張、「三井の幹部等ニも之等の点に於て存外つまらぬ人等多き様」であると指摘し、そのような人々は「も少し Human Life の如何なる物かを考へたらよからん」と資本家・経営者の姿勢を批判している。

以上二通の手紙を紹介してみたが、後年の石田の活躍ぶりを髣髴とさせる実に率直な内容といえる。逆に言えば、四四歳も年長の「天保生まれの老人」たる江原が、このような若い人の意見を吸収できるだけの柔軟な思想を有していたことを示しているのである。

ぬまづ近代史点描

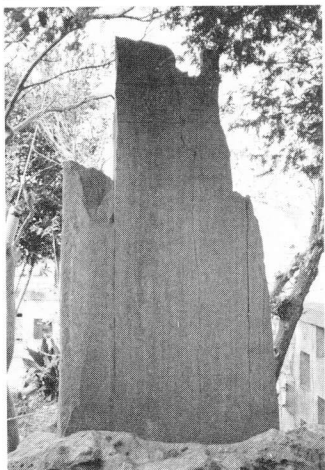
⑬

## 海済団と海済丸

古来沼津は港町であった。様々な物資の集散地として多くの船が出入した。そのため海難救助を担当する組織が発達した。周辺の我入道村や内浦・西浦の漁村では若者組がその機能を担ったようであるが、沼津宿では本町に属した下

河原の壮年男子が「船手若者」として組織された。主に漁業や塩業に従事した人々であった。それは公的に制度化されたものであり、浦手役という役人の監督下に置かれていた。

また、浦手役との異同がはっきりしないが、船手名主という役職も置かれていた。船舶運漕のこと



海済丸記念碑  
(沼津市下河原・川辺神社)

や難破船の取り扱いなどを担当した。沼津宿には本町だけに置かれていて、新居氏、久保田氏、窪田氏、和田氏などがつとめたという。新町と仲町の四辻には船手高札が設置され、船舶に関する法令を専門に掲示した。

ところが明治維新後これらの制度が廃止されると、下河原では私的に「海済団」と称する結社をつくり、海難救助活動を続行するこ

とにした。

海済団には活動用の専用船があったが、その不足を感じていた団員は有志の協力を得て千茂登座を会場に慈善演劇を開催、その収入と沼津町からの補助金とで新しい船を一隻建造することにした。明治三四年（一九〇一）二月に完成したその船は、「海済丸」と名付けられた。

そのことを記念した石碑を川辺神社に建立することになり、丁長（団長のことか）大熊初太郎は前沼津町長大道寺治郎に撰文を依頼した。そして同年五月、その記念

碑が建設されたのである。

以上述べたような海済団と海済丸に関する由来を刻んだ石碑の原文が左に掲げたものである。なお現存する石碑は一部欠損しており碑文もなくなってしまう部分があるが、大道寺治郎が書き残した碑文章稿と突き合わせることで文章を復元してみた。

《参考文献》間宮喜十郎稿「沼津史料 第一」、同「沼津史料 第六」、沼津市郷土研究会編「沼津市誌 全」、大道寺治郎綴「職務録」（大道寺豊氏所蔵）。

## 海済丸記

徳川幕府之制置吏于沿海之地称曰浦手役取郷曲丁壯服漁塩者属之称曰船手若者每有船舶遇颶於海中者吏率而救済之吾郷下河原丁壯世充船手若者明治之初吏廢丁壯則私結伍曰海済団常具船楫以備赴船舶之急其義勇為世人所称先是丁壯憾船之堅者不足乃謀諸遠近志士延俳優張慈善演劇于千茂登座用其所入之資併沼津町補助金新造船隻令茲式月成堅而疾命曰海済丸郷之川辺神丁壯所崇敬也將頼神威靈以当救済之事因立石于祠前記其由使後之丁壯有所勗焉乃者丁長乞余文夫敬神尚義吾郷俗之所固有況得船之堅而新者自今而後丁壯之功徳顯於暴風猛雨激浪衝天之間蓋大可知也於是乎記

明治三十四年五月

沼津大道寺治郎撰  
沼津鳥沢恭三謹書  
真島清太郎鐫

お知らせ欄

◎常設展示替え「目でみる沼津の歴史」について

当館ではこれまで、「江原素六」「沼津兵学校」あるいは「明治」だけでなく、それ以外のテーマや時代を対象とした企画展を開催したり、史料を収集・保存してきました。去る一二月二〇日(日)から公開することになった今回の常設展示替えでは、これらの成果や史料を盛り込み、沼津の通史を構成しました。

●原始時代の沼津
その内容は以下の通りです。



- 古代の沼津
●中世の沼津
●戦国時代の沼津

●近世の沼津

領主/沼津宿と原宿/農民の生活/漁民の生活/愛鷹牧/江戸時代の文化

●近現代の沼津

静岡藩/維新の諸改革/文明開化と殖産興業/東海道線の開通と沼津御用邸/日清・日露戦争/産業革命と沼津市の誕生/大正デモクラシーの時代/昭和の十五年戦争/戦後の民主化と復興/高度経済成長
なお、「江原素六」と「沼津兵学校」のコーナーは、当館の特殊テーマとして従来通りです。

◎歴史講座の受講者を募集します

常設展示の中に通史コーナーを充実したことに合わせ、古い時代から新しい時代にわたる郷土に関する様々なテーマを取り上げた歴史講座を開催します。
時間・午後2時~4時
場所・明治史料館講座室
定員・五〇名

受講料・無料
日程・講師・演題・表の通り

Table with 3 columns: 日 程, 講 師, テ ー マ. It lists dates from Feb 6 to Feb 27, speakers like 川島茂裕氏 and 樋口雄彦, and topics like 源頼朝の富士山裾野の巻狩 and 戦時下の軍隊と静岡県民.

◎沼津市明治史料館史料目録13の刊行について

『岡一色・西沢田区有文書目録』B5判 九六頁 頒価一三〇〇円
当館に寄託されている岡一色六二〇点、西沢田二五二点の近世から近代にかけての区有文書について、目録化したものです。

◎受贈刊行物の紹介

歴史論叢第二号(静岡県歴史研究会)、湯山半七郎日記(裾野市史編さん室)、写真集静岡県体育・スポーツ史(静岡県体育協会)、創立五十周年記念誌(沼津工業高等学校)、駿河第47号(駿河郷土史研究会)、ふるさとの暮らしと祭り(裾野市立富士山資料館)、無阪町立郷土資料館年報第1号(無阪町立郷土資料館)、信仰の道秋葉道(新居関所史料館)、加藤まさを(藤枝市郷土博物館)、金谷町史地誌編(金谷町役場)、静岡の文化第31号(静岡県文化財団)、小山町の歴史第6号(小山町役場町史編さん室)、小山町史資料所在目録第12~15集(同上)、森町所在古文書目録第7集(森町史編さん委員会)、三島市誌増補資料編II(三島市)。
以上最近受贈の県内関係のもの。

沼津市明治史料館通信 第32号

編集 沼津市明治史料館 発行

〒410 沼津市西熊堂三二二-1
電話 〇五五九-三三三三五
FAX 〇五五九-五三三〇一八